

農業経営基盤の強化の促進に関する基本的な構想

令和5年(2023年)9月

遠 軽 町

目 次

第1 農業経営基盤の強化の促進に関する目標	- 1 -
1 遠軽町農業の概況	- 1 -
2 遠軽町農業の現状と課題	- 1 -
3 農業経営基盤の強化の促進に関する取組方向	- 1 -
4 新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保に関する目標	- 3 -
第2 農業経営の規模、生産方式、経営管理の方法、農業従事の態様等に関する営農の類型ごとの効率的かつ安定的な農業経営の指標	- 4 -
第3 農業経営の規模、生産方式、経営管理の方法、農業従事の態様等に関する営農の類型ごとの新たに農業経営を営もうとする青年等が目標とすべき農業経営の指標	- 9 -
第4 第2及び第3に掲げる事項のほか、農業を担う者の確保及び育成に関する事項	- 10 -
1 農業を担う者の確保及び育成の考え方	- 10 -
2 遠軽町が主体的に行う取組	- 10 -
3 関係機関との連携・役割分担の考え方	- 11 -
4 就農等希望者のマッチング及び農業を担う者の確保・育成のための情報収集・相互提供	- 11 -
第5 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標その他農用地の効率的かつ総合的な利用に関する事項	- 11 -
1 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標	- 11 -
2 その他農用地の効率的かつ総合的な利用に関する事項	- 12 -
第6 農業経営基盤強化促進事業に関する事項	- 12 -
1 第18条第1項の協議の場の設置の方法、第19条第1項に規定する地域計画の区域の基準その他第4条第3項第1号に掲げる事業に関する事項	- 12 -
2 農用地利用改善事業の実施の単位として適当であると認められる区域の基準その他農用地利用改善事業の実施の基準に関する事項	- 12 -
3 農業協同組合が行う農作業の委託のあっせんの促進その他の委託を受けて行う農作業の実施の促進に関する事項	- 16 -
4 その他農業経営基盤強化促進事業の実施に関し必要な事項	- 16 -
5 農地中間管理機構が行う特例事業に関する事項	- 16 -
第7 その他	- 16 -

第1 農業経営基盤の強化の促進に関する目標

1 遠軽町農業の概況

遠軽町は、北海道の東北部、オホーツク総合振興局管内のほぼ中央内陸側、紋別郡の南東部に位置し、北は紋別市・滝上町、東は湧別町・佐呂間町、西は上川町、南は北見市留辺蘂町に接しており、東西47km、南北46kmで、総面積1,332.45km²を有している。

地形は、東南と西北を北海道の屋根と称されている大雪山系から連なる標高500～1,800mの山に囲まれ、北東部は湧別平野に開かれている。湧別川がほぼ中央部を貫流しており、支湧別川、武利川、丸瀬布川、瀬戸瀬川、生田原川、社名淵川などの支流が合流し、その流域に沿って小規模な平坦地とこれに連なる丘陵地があり、傾斜地が多い地形となっている。

気象条件は、オホーツク海の影響を受け、年平均降水量は870mmであり、年平均気温は6.0℃と冷涼な気候で、夏冬及び昼夜の寒暖の差が大きい。

これらの条件により、遠軽町においては耐冷性の高い小麦・てん菜・馬鈴しょ等を基幹作物とした畑作、酪農を中心に農業生産を行っている。

2 遠軽町農業の現状と課題

農業経営体数は、農林業センサスによると平成22年で184経営体、平成27年で139経営体、令和2年で95経営体と年々減少を続けており、農業従事者の高齢化や後継者不足による離農などにより、今後も減少することが見込まれる。

農家1戸当たりの経営耕地面積は、平成22年で35.7ha、平成27年で44.4ha、令和2年で59.2haと、離農による農業経営体数減少などの影響により、年々増加している状況にある。

農地は、沢沿いの丘陵・傾斜地が多く、分散している箇所もある。

畑作においては、小麦・てん菜・馬鈴しょ・かぼちゃ・スイートコーンを基幹作物とするほか、牧草・デントコーン等の飼料作物、高収益作物として青しそ・アスパラガス・ブロッコリー等の導入が図られている。

酪農においては、乳用牛の飼養経営体数は減少しているものの、飼養頭数は平成27年の9,385頭（1戸当たり149頭）に対し、令和2年は7,101頭（1戸当たり169頭）と1戸当たりの飼養頭数は増加している。また、肉用牛においても、同様に飼養経営体数は減少しているものの飼養頭数は増加している。

近年の農業経営をめぐる環境の変化は著しく、農畜産物の需給の不均衡や輸入増加、産地間競争の激化、消費者の食の安全・安心に対する関心の高まりなど、大変厳しい状況にある。

遠軽町の農業がこれらの条件を克服し、地域社会の経済を支える基幹産業として発展していくためには、地域の特性を活かした作物の導入、意欲ある農業者の育成、6次産業化の推進、生産性が高く環境に配慮した低コストで高品質な農畜産物を安定的に生産していく必要がある。

3 農業経営基盤の強化の促進に関する取組方向

(1) 基本的な考え方

遠軽町の農業が持続的に発展していくためには、関係機関が連携し、地域の実情に応じて、家族経営をはじめとする農業経営体が経営体質と生産基盤の強化を図りながら、農業生産額の増大や生産コストの縮減による農業所得の増大と6次産業化による農業経営の多角化の取組を推進するとともに、農業経営体を支える営農支援組織の育成を行うなど、効率的かつ安定的で多様な農業経営を育成・確保し、これらの担い手への農用地の利用集積・集約化を促進する。

また、持続可能な開発目標（SDGs）の目標の一つである持続可能な農業生産を進めるため、環境と調和した農業を推進する。

(2) 効率的かつ安定的な農業経営の目標とする所得水準及び労働時間

農業が職業として選択できる魅力のあるものとするため、遠軽町又はその近隣の市町村に

において既に実現している優良な経営の事例を踏まえ、主たる従事者が地域における他産業従事者と遜色のない年間労働時間の水準を達成しつつ、他産業従事者並みの生涯所得に相当する年間農業所得を確保できる効率的かつ安定的な農業経営の育成・確保に努める。

なお、目標とする所得水準及び労働時間は次のとおりとする。

目標年間農業所得	主たる従事者1人当たりおおむね450万円
目標年間労働時間	主たる従事者1人当たり1,700～2,000時間程度

※主たる従事者～農業経営において主体的な役割を担い、中心となって当該農業経営に従事する者

(3) 新たに農業経営を営もうとする青年等の目標とする所得水準及び労働時間

自ら農業経営を開始しようとする青年等（法人の場合にあっては主たる従事者）の経営開始5年後における所得水準及び労働時間は、(2)に定める水準をおおむね達成することを目標とする。

ただし、このうち農外からの就農者や農家子弟のうち親から独立した経営を開始する者にあっては、経営が安定するまで時間を要することから、経営開始5年後の所得水準は、おおむね5割の達成を目標とする。

(4) 効率的かつ安定的な農業経営の育成・確保

ア 認定農業者制度の活用

効率的かつ安定的な農業経営の改善を促進するため、認定農業者制度を活用し、農業経営改善計画の作成指導や認定後の農業経営改善計画達成に向けた市町村や農業委員会、農業協同組合、農業改良普及センターなど地域の関係機関・団体による指導・助言、女性や若い世代、高齢者の能力を活かすための夫婦・親子間の農業経営改善計画の共同申請を推進する。

また、認定農業者若しくは認定新規就農者（以下「認定農業者等」という。）の担い手が主体性と創意工夫を発揮しながら経営発展できるよう、担い手への農用地の利用集積・集約化やICT※等の省力化技術の導入等の推進及び経営所得安定対策、低利融資制度など各種支援施策の活用を支援する。

※ICTは、Information and Communication Technology（情報通信技術）の略

イ 農業経営の法人化の推進

農業経営の法人化は、経営管理の高度化や安定的な雇用の確保、地域の農地や優れた技術の円滑な継承など経営安定・発展の効果が期待されることから、税理士等の専門家や先進的な農業者による指導等を通じ、法人化のメリットや手続、財務・労務管理に関する情報やノウハウ等の普及啓発によって、農業経営の法人化を推進する。

また、民間企業等の経営力や資本力を活かした地域の農業者・関係者との有機的な取組を推進する。

このため、令和12年度（2030年度）における農業法人数を5,500経営体とする北海道農業経営基盤強化促進基本方針の目標などを踏まえ、遠軽町の令和12年度における農業法人数の目標数を23経営体（令和3年1月現在：19経営体）とし、農業経営の法人化を推進する。

ウ 集落営農の組織化・法人化の推進

経営規模が小さな畑作野菜地帯や、農業従事者の高齢化、担い手不足が深刻化し、当面、今後の地域農業を担うこととなる個別経営や法人経営の育成・確保が難しい地域においては、農用地利用改善団体等によって集落の現状と将来についての話し合い活動を重ね、担い手の明確化や農用地の利用集積の方向を定める取組を推進することにより、集落営農の組織化、及び将来的な集落営農の法人化を推進する。

エ 新規就農者の育成・確保

遠軽町の農業が、将来に向け持続的に発展していくためには、次代を担う新規就農者の育成・確保を図る必要があるため、遠軽町農業担い手対策協議会をはじめとした各関係機関と連携し、農業への理解の醸成と関心の喚起に向けた取組を推進するほか、雇用就農を含めた就農促進に向けた情報提供や相談活動に取り組むことが重要である。

また、優れた経営感覚を身につけ、就農後における早期の経営安定を図るため、農業大学校等における実践的な研修教育や農業改良普及センターによる技術・経営指導、指導農業士等との連携など地域の研修体制の充実・強化等により、就農から経営安定までの総合的な支援や地域の受入体制づくりを推進する。

就農希望者の経営に必要な農地や機械等の確保及び初期投資等による負担軽減のため、各種支援策の活用を推進する。

家族経営体における経営移譲や第三者経営継承、組織経営体の構成員の世代交代など、次の世代の担い手へ地域の農地や優れた技術を円滑に継承する取組を推進する。

オ 労働力不足への対応

農家戸数の減少や農業従事者の高齢化などによる慢性的な労働力不足に対応するため、若者、女性、他産業を退職した人材や外国人材などの多様な人材の確保と、障がい者の社会参画と農業経営の発展の双方を実現する「農福連携」により、雇用労働力の安定的な確保に向けた取組を推進する。

また、ロボット技術やICTの活用等、近年の進歩が著しく、構造的問題などの解決が期待されるスマート農業などの省力化生産技術、労働力不足に対応した生産技術等を積極的に推進する。

カ 女性農業者が活躍できる環境づくり

農業・農村の活性化につながる女性の経営・社会参画を促進するため、女性農業者の経営管理や生産技術等の向上、若い世代の女性農業者のネットワーク強化やグループ活動の活性化等により、女性農業者が活躍できる環境づくりを進め、持続可能な開発目標（SDGs）の目標の一つである男女平等参画や女性の活躍を推進する。

(5) 農用地の利用集積と集約化

「地域計画※」の策定及び実現に向けて、地域計画推進事業、農用地利用改善事業、農地中間管理事業、農地中間管理機構（農地中間管理事業の推進に関する法律（平成25年法律第101号）第2条第4項に規定する農地中間管理機構をいう。以下同じ。）の特例事業等の農地流動化施策を推進し、効率的かつ安定的な農業経営への計画的な農用地の利用集積・集約化を促進する。

※地域計画は、これまでの人・農地プランを基礎として、農業経営基盤強化促進法（昭和55年法律第65号）第19条の規定に基づき、農業者等の協議の結果を踏まえ、農業の将来の在り方や農用地の効果的かつ総合的な利用に関する目標として農業を担う者ごとに利用する農用地等を表示した地図などを明確化し、市町村により公表されるもの。

(6) 多様な農業経営の育成・確保

高収益作目やクリーン・有機農業の導入による農業経営の複合化や、農畜産物の加工や直接販売、ファームインといった6次産業化による多角化など、自らの創意工夫を活かした多様な農業経営の育成・確保を図る。

(7) 営農支援体制の整備

生産性の向上や労働負担の軽減などを図るため、コントラクターやTMRセンター、酪農ヘルパーなどの営農支援組織の育成や体制整備を推進し、共同作業体系の確立、オペレーターなどの雇用のマッチングに向けた取組を推進するなど、多様な人材の確保と円滑な運営を促進する。

4 新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保に関する目標

(1) 新規就農の現状

遠軽町の令和2年度の新規就農者は4人であり、過去10年間、ほぼ横ばいの状況となっているが、酪農や畑作の維持・拡大を図っていくため、将来にわたって地域農業の担い手を安定的かつ計画的に確保していく必要がある。

(2) 新たに農業経営を営もうとする青年等の確保に関する目標

(1)に掲げる状況を踏まえ、遠軽町は青年層に農業を職業として選択してもらえよう、将来（農業経営開始から5年後）の農業経営の発展の目標を明らかにし、新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保を図っていくものとする。

ア 確保・育成すべき人数の目標

国が掲げる新規就農し定着する農業者を年間1万人から2万人に倍増するという新規就農者の確保・定着目標や北海道農業経営基盤強化促進基本方針に掲げられた年間670人の新規就農者の育成・確保目標を踏まえ、遠軽町においては年間4人の当該青年等の確保を目標とする。また、現在の雇用就農の受け皿となる法人を10年間で4法人増加させる。

イ 新たに農業経営を営もうとする青年等の労働時間・農業所得に関する数値目標

自ら農業経営を開始しようとする青年等（法人の場合にあっては主たる従事者）の経営開始5年後における所得水準及び労働時間は、遠軽町又はその近隣の市町村において既に実現している優良な経営の事例を踏まえ、主たる従事者が、地域における他産業従事者と遜色のない年間労働時間（主たる従事者1人当たり1,700～2,000時間程度）及び、他産業従事者並みの生涯所得に相当する年間農業所得（主たる従事者1人当たりの年間農業所得450万円程度）を目標とする。

ただし、このうち農外からの就農者や農家子弟のうち親から独立した経営を開始する者には、経営が安定するまで時間を要することから、経営開始5年後の所得水準は、主たる従事者1人当たりの年間農業所得225万円程度を目標とする。

第2 農業経営の規模、生産方式、経営管理の方法、農業従事の態様等に関する営農の類型ごとの効率的かつ安定的な農業経営の指標

第1の3の(2)に示した目標を達成しうる効率的かつ安定的な農業経営の指標として、遠軽町又は周辺市町村で展開している優良事例を踏まえつつ、遠軽町における主要な営農類型についてこれを示すと次のとおりである。

営農類型	経営規模	生産方式	経営の方向と 経営管理の方法	農業従事の態様等
酪農Ⅰ型 〔個別経営体〕	<p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・チモシー主体採草地 48.0ha ・サイレージ用トウモロコシ 17.5ha ・施設用地 2.0ha <p>経営面積計 67.5ha (うち借地 14.7ha)</p> <p><飼養頭数></p> <ul style="list-style-type: none"> ・経産牛 80頭 ・育成牛 63頭 <p>常時飼養頭数 143頭</p>	<p><機械施設装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・成牛舎(800㎡) 1棟 ・育成舎(468㎡) 1棟 ・機械庫(198㎡) 1棟 ・バンカーサイロ(3,428㎡) 一式 ・カーフハッチ 9個 ・堆肥舎(390㎡) 一式 ・尿溜(411㎡) 一式 ・バルククーラー(6,000L) 1台 ・パイプラインミルカー(8台) 一式 ・自動給餌機 一式 ・トラクター 2台 ・農用トラック(4tダンプ) 1台 <p><生産方式等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・経産牛・育成牛ともにスタンション方式による飼養管理 ・サイロはバンカーサイロによる経費節減 ・トラクターは個人所有、大型作業機はコントラクター等による外部化 ・草地の計画的更新 ・酪農ヘルパーの活用による乳牛飼養時間の軽減 ・スマート農業技術導入による省力化 ・公共牧場や哺育育成センターを利用した哺育・育成牛管理 	<ul style="list-style-type: none"> ・組合勘定やパソコン活用による経営計画・労務・財務・ほ場・飼養管理、青色申告の実施 ・乳牛検定データの活用 ・飼養部門と飼料生産部門の損益・原価把握、分析 ・税理士や各種経営管理ツールを活用した経営改善 	<p><労働></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族 4人 4,455時間 ・雇用 992時間 <p>(主たる従事者 2,000時間/人)</p> <p><経営収支></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業粗収益 7,814万円 ・農業経営費 6,884万円 ・農業所得 930万円 <p>(主たる従事者 418万円/人)</p>
酪農Ⅱ型 〔個別経営体〕	<p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・チモシー主体採草地 90.8ha ・サイレージ用トウモロコシ 24.6ha ・施設用地 3.0ha <p>経営面積計 118.4ha (うち借地 26.0ha)</p> <p><飼養頭数></p> <ul style="list-style-type: none"> ・経産牛 150頭 ・育成牛 126頭 <p>常時飼養頭数 276頭</p>	<p><機械施設装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・フリーストール牛舎(2,799㎡) 1棟 ・ミルクパラー(230㎡) 1棟 ・パドック(1,500㎡) 一式 ・機械庫(396㎡) 1棟 ・バンカーサイロ(4,571㎡) 一式 ・カーフハッチ 17個 ・スラリーストア(1,279㎡) 1基 ・曝気槽(271㎡) 1基 ・バルククーラー(8,000L) 1台 ・ミルクシステム(ハリボン6W) 一式 ・えさ寄せロボット 1台 ・ミキサーフィーダー(14㎡牽引) 1台 ・スキッドローダー 1台 ・ホイールローダー(ハケット1.5㎡) 1台 ・トラクター 4台 ・農用トラック(4tダンプ) 1台 <p><生産方式等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・経産牛・育成牛ともにフリーストール方式による飼養管理 ・ミルクパラーによる搾乳 ・サイロはバンカーサイロによる経費節減 ・トラクターは個人所有、大型作業機はコントラクター等による外部化 ・草地の計画的更新 ・酪農ヘルパーの活用による乳牛飼養時間の軽減 ・スマート農業技術導入による省力化 ・公共牧場や哺育育成センターを利用した哺育・育成牛管理 	<ul style="list-style-type: none"> ・組合勘定やパソコン活用による経営計画・労務・財務・ほ場・飼養管理、青色申告の実施 ・乳牛検定データの活用 ・飼養部門と飼料生産部門の損益・原価把握、分析 ・税理士や各種経営管理ツールを活用した経営改善 	<p><労働></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族 5人 5,643時間 ・雇用 1,384時間 <p>(主たる従事者 2,000時間/人)</p> <p><経営収支></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業粗収益 14,444万円 ・農業経営費 12,924万円 ・農業所得 1,520万円 <p>(主たる従事者 539万円/人)</p>

営農類型	経営規模	生産方式	経営の方向と 経営管理の方法	農業従事の態様等
酪農Ⅲ型 [組織経営体]	<p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・モシニ主体採草地 153.5ha ・サイレージ用トウモロコシ 68.9ha ・施設用地 3.0ha <p>経営面積計 225.4ha (うち借地 50.1ha)</p> <p><飼養頭数></p> <ul style="list-style-type: none"> ・経産牛 300頭 ・育成牛 257頭 <p>常時飼養頭数 557頭</p> <p><協業法人></p> <ul style="list-style-type: none"> ・構成員戸数 3戸 	<p><機械施設装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・フリーストール牛舎(2,913㎡) 1棟 ・ミルクパラー(976㎡) 1棟 ・分娩舎(369㎡) 1棟 ・哺育舎(275㎡) 1棟 ・育成舎(1,910㎡) 1棟 ・乾乳舎(118㎡) 1棟 ・飼料庫(350㎡) 1棟 ・機械庫(594㎡) 1棟 ・バンカーサイロ(6,570㎡) 一式 ・スライストア(4,182㎡) 1基 ・曝気槽(617㎡) 1基 ・バルククーラー(15,000L) 1台 ・ミルクシステム(ロータリー24P) 一式 ・自動哺乳システム 1台 ・えさ寄せロボット 1台 ・スキッドローダー 2台 ・ミキサーフィーダー(23㎡自走) 1台 ・ホイールローダー(バケット3㎡) 2台 ・スラリータンカー(18.2t) 2台 ・トラクター 7台 ・農用トラック(4tダンプ) 4台 <p><生産方式等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・経産牛・育成牛ともにフリーストール方式による飼養管理 ・ミルクパラーによる搾乳 ・サイロはバンカーサイロによる経費節減 ・トラクターは個人所有、大型作業機はコントラクター等による外部化 ・草地の計画的更新 ・酪農ヘルパーの活用による農休日の設定・対応 ・スマート農業技術導入による省力化 ・公共牧場や哺育育成センターを利用した哺育・育成牛管理 	<ul style="list-style-type: none"> ・組合勘定やパソコン活用による経営計画・労務・財務・ほ場・飼養管理、青色申告の実施 ・乳牛検定データの活用 ・飼養部門と飼料生産部門の損益・原価把握、分析 ・税理士や各種経営管理ツールを活用した経営改善 ・労務管理(人事、教育、福利厚生等)の充実 	<p><労働></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族 8人 7,882時間 ・雇用 5,396時間 <p>(主たる従事者 2,000時間/人)</p> <p><経営収支></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業粗収益 27,696万円 ・農業経営費 25,352万円 ・農業所得 2,344万円 <p>(主たる従事者 595万円/人)</p>
肉用牛 (肉専用種繁殖) [個別経営体]	<p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・混播主体採草地 67.4ha ・施設用地 0.8ha <p>経営面積計 68.2ha (うち借地 19.1ha)</p> <p><飼養頭数></p> <ul style="list-style-type: none"> ・繁殖牛 120頭 ・後継牛 40頭 ・育成牛 89頭 <p>常時飼養頭数 249頭</p>	<p><機械施設装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・繁殖牛舎(662㎡) 1棟 ・屋外給餌場(581㎡) 一式 ・育成牛舎(756㎡) 1棟 ・分娩牛舎(594㎡) 一式 ・機械庫(198㎡) 1棟 ・堆肥舎(575㎡) 一式 ・トラクター 1台 ・農用トラック(2tダンプ) 1台 ・ホイールローダー 1台 <p><生産方式等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・繁殖牛・後継牛・育成牛ともに牛房群飼による飼養管理 ・コントラクターによる粗飼料収穫と堆肥散布の外部化 ・草地の計画的更新 ・酪農ヘルパーの活用による飼養時間の軽減 	<ul style="list-style-type: none"> ・組合勘定やパソコン活用による経営計画・労務・財務・ほ場・飼養管理、青色申告の実施 ・飼養部門と飼料生産部門の損益・原価把握、分析 ・税理士や各種経営管理ツールを活用した経営改善 	<p><労働></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族 2人 2,724時間 ・雇用 1,200時間 <p>(主たる従事者 1,800時間/人)</p> <p><経営収支></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業粗収益 4,435万円 ・農業経営費 2,904万円 ・農業所得 1,531万円 <p>(主たる従事者 1,011万円/人)</p>

営農類型	経営規模	生産方式	経営の方向と 経営管理の方法	農業従事の態様等
肉用牛 (乳用種肥育) [個別経営体]	<p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・牧草(乾草)24.0ha ・牧草(サイレージ) 6.4ha ・サイレージ用トラモロコシ 14.9ha ・施設用地 1.1ha <p>経営面積計 46.4ha (うち借地 12.8ha)</p> <p><飼養頭数></p> <ul style="list-style-type: none"> ・育成牛 170頭 ・肥育牛 400頭 <p>常時飼養頭数 570頭</p>	<p><機械施設装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・肥育牛舎(2,196㎡) 1棟 ・育成牛舎(529㎡) 1棟 ・人工哺育牛舎(240㎡) 1棟 ・機械庫(198㎡) 1棟 ・D型庫(198㎡) 1棟 ・堆肥舎(1,503㎡) 一式 ・トラクター 2台 ・農用トラック(4tダンプ) 1台 ・スキッドローダー 2台 ・ホイールローダー 2台 ・ミキサーフィーダー 2台 ・細断式ロールバレー 1台 <p><生産方式等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・育成牛・肥育牛ともに牛房群飼による飼養管理 ・コントラクターによる粗飼料収穫と堆肥散布の外部化 ・草地の計画的更新 ・堆肥の経営内利用 ・酪農ヘルパーの活用による飼養時間の軽減 ・スマート農業技術導入による省力化 	<ul style="list-style-type: none"> ・組合勘定やパソコン活用による経営計画・労務・財務・ほ場・飼養管理、青色申告の実施 ・飼養部門と飼料生産部門の損益・原価把握、分析 ・税理士や各種経営管理ツールを活用した経営改善 	<p><労働></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族 3人 5,600時間 ・雇用 887時間 <p>(主たる従事者 2,000時間/人)</p> <p><経営収支></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業粗収益 16,837万円 ・農業経営費 15,506万円 ・農業所得 1,331万円 <p>(主たる従事者 475万円/人)</p>
畑作I型 [個別経営体]	<p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・秋まき小麦 20.0ha ・てん菜(直播) 10.0ha ・馬鈴しょ(生食加工) 5.0ha ・スイートコーン(加工用) 10.0ha ・休閒緑肥 5.0ha <p>経営面積計 50.0ha (うち借地 13.3ha)</p>	<p><機械施設装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農舎(作業・資材庫) 1棟 ・トラクター 2台 ・農用トラック(2tダンプ) 1台 ・グレンドリル 1台 ・プランター 1台 ・ポテトプランター 1台 ・スプレヤー 1台 ・ビートハーベスター 1台 ・ポテトハーベスター 1台 <p><生産方式等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4年輪作 ・麦の収穫・乾燥調製は共同施設による ・一部の作物は機械の共同利用による共同作業とする ・秋まき小麦収穫後に後作緑肥を栽培し土づくりを推進 ・スマート農業技術導入による省力化 ・一部の集約作物は雇用により家族労働時間の軽減を図る 	<ul style="list-style-type: none"> ・組合勘定やパソコン活用による経営計画・労務・財務・ほ場管理、青色申告の実施 ・作目別原価の把握と分析 ・税理士や各種経営管理ツールを活用した経営改善 ・家族経営協定の締結に基づく給料制・休暇制の導入 	<p><労働></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族 2人 1,823時間 ・雇用 293時間 <p>(主たる従事者 1,215時間/人)</p> <p><経営収支></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業粗収益 3,250万円 ・農業経営費 2,435万円 ・農業所得 815万円 <p>(主たる従事者 543万円/人)</p>

営農類型	経営規模	生産方式	経営の方向と 経営管理の方法	農業従事の態様等
畑作Ⅱ型 [組織経営体]	<p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・秋まき小麦 55.0ha ・てん菜(移植) 10.0ha ・てん菜(直播) 15.0ha ・馬鈴しょ(生食加工) 25.0ha ・スイートコーン(加工用) 10.0ha ・休閒緑肥 5.0ha <p>経営面積計 120.0ha (うち借地 14.5ha)</p> <p><協業法人></p> <ul style="list-style-type: none"> ・構成員戸数 3戸 	<p><機械施設装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農舎(作業・資材庫) 1棟 ・トラクター 4台 ・農用トラック(4tダンプ) 1台 ・グレンドリル 1台 ・プランター 1台 ・ビート移植機 1台 ・ポテトプランター 1台 ・スプレヤー 1台 ・ビートハーベスター 1台 ・ポテトハーベスター 1台 <p><生産方式等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4年輪作 ・麦の収穫・乾燥調製は共同施設による ・一部の作物は機械の共同利用による共同作業とする ・秋まき小麦収穫後に後作緑肥を栽培し土づくりを推進 ・スマート農業技術導入による省力化 ・一部の集約作物は雇用により家族労働時間の軽減を図る 	<ul style="list-style-type: none"> ・組合勘定やパソコン活用による経営計画・労務・財務・ほ場管理、青色申告の実施 ・作目別原価の把握と分析 ・税理士や各種経営管理ツールを活用した経営改善 ・家族経営協定の締結に基づく給料制・休暇制の導入 	<p><労働></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族 6人 6,945時間 ・雇用 1,047時間 <p>(主たる従事者 1,543時間/人)</p> <p><経営収支></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業粗収益 10,360万円 ・農業経営費 5,996万円 ・農業所得 4,365万円 <p>(主たる従事者 970万円/人)</p>
畑作野菜 [個別経営体]	<p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・秋小麦 9.0ha ・てん菜(移植) 9.0ha ・青しそ(搾油用) 6.0ha ・かぼちゃ(加工用) 2.0ha ・ブロッコリー 1.0ha ・アスパラガス(ハウス立茎) 0.3ha <p>経営面積計 27.3ha (うち借地 11.5ha)</p>	<p><機械施設装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農舎(作業・資材庫) 1棟 ・てん菜育苗ハウス 1棟 ・アスパラガス用ハウス 9棟 ・トラクター 2台 ・農用トラック(4tダンプ) 1台 ・グレンドリル 1台 ・プランター 1台 ・スプレヤー 1台 ・サブソイラー 1台 ・ビート移植機 1台 ・ビートハーベスター 1台 ・しそ播種機 1台 ・しそ刈取機 4台 <p><生産方式等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4年輪作 ・麦の収穫・乾燥調製は共同施設による ・アスパラガスの選別は機械の共同利用による共同作業とする ・秋まき小麦収穫後に後作緑肥を栽培し土づくりを推進 ・スマート農業技術導入による省力化 ・一部の集約作物は雇用により家族労働時間の軽減を図る 	<ul style="list-style-type: none"> ・組合勘定やパソコン活用による経営計画・労務・財務・ほ場管理、青色申告の実施 ・作目別原価の把握と分析 ・税理士や各種経営管理ツールを活用した経営改善 ・家族経営協定の締結に基づく給料制・休暇制の導入 	<p><労働></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族 2人 3,597時間 ・雇用 1,115時間 <p>(主たる従事者 1,998時間/人)</p> <p><経営収支></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業粗収益 3,573万円 ・農業経営費 2,230万円 ・農業所得 1,343万円 <p>(主たる従事者 746万円/人)</p>

※営農類型のうち、酪農・畜産に関する類型は、酪農・肉用牛生産近代化計画から代表的な類型を抜粋している。

※営農類型のうち、畑作に関する類型は、えんゆう農業協同組合「第5次中期農業振興計画・経営計画2019年～2023年」、北海道農業生産技術体系、北海道営農Naviなどにより試算し、例示している。

第3 農業経営の規模、生産方式、経営管理の方法、農業従事の態様等に関する営農の類型ごとの新たに農業経営を営もうとする青年等が目標とすべき農業経営の指標

第1の3の(3)に示した目標を達成しうる青年等が目標とすべき農業経営の指標は、第2に定めるものと同様である。

ただし、農外からの就農者や農家子弟のうち親から独立した経営を開始する者にあつては、指標を例示すると次のとおりである。

営農類型	経営規模	生産方式	経営の方向と経営管理の方法	農業従事の態様等
酪農専業 [個別経営体]	<p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・モシニ主体採草地 24.0ha ・サイレージ用トラモロシ 9.0ha ・施設用地 2.0ha <p>経営面積計 35.0ha (うち借地 7.4ha)</p> <p><飼養頭数></p> <ul style="list-style-type: none"> ・経産牛 40頭 ・育成牛 24頭 <p>常時飼養頭数 64頭</p>	<p><機械施設装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・成牛舎(400㎡) 1棟 ・育成舎(177㎡) 1棟 ・機械庫(198㎡) 1棟 ・カーハッチ 5個 ・堆肥舎(229㎡) 一式 ・尿溜(197㎡) 一式 ・バルククーラー(5,000L) 1台 ・パイプラインミルク(6台) 一式 ・トラクター 2台 ・農用トラック(2tダンプ) 1台 <p><生産方式等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・経産牛・育成牛ともにスタンション方式による飼養管理 ・サイロはバンカーサイロによる経費節減 ・トラクターは個人所有、大型作業機はコントラクター等による外部化 ・草地の計画的更新 ・酪農ヘルパーの活用による乳牛飼養時間の軽減 ・公共牧場や哺育育成センターを利用した哺育・育成牛管理 	<ul style="list-style-type: none"> ・組合勘定やパソコン活用による経営計画・労務・財務・ほ場・飼養管理、青色申告の実施 ・乳牛検定データの活用 ・飼養部門と飼料生産部門の損益・原価把握、分析 ・税理士や各種経営管理ツールを活用した経営改善 ・資金繰り表等による資金管理 	<p><労働></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族 2人 2,984時間 ・雇用 192時間 <p>(主たる従事者 2,000時間/人)</p> <p><経営収支></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業粗収益 3,764万円 ・農業経営費 3,214万円 ・農業所得 550万円 <p>(主たる従事者 369万円/人)</p>
畑作 [個別経営体]	<p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・秋まき小麦 16.0ha ・てん菜(直播) 8.0ha ・馬鈴しょ(生食加工) 4.0ha ・スイートコーン(加工用) 8.0ha ・休閒緑肥 4.0ha <p>経営面積計 40.0ha (うち借地 10.7ha)</p>	<p><機械設備装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農舎(作業・資材庫) 1棟 ・トラクター 2台 ・農用トラック(2tダンプ) 1台 ・グレンドリル 1台 ・プランター 1台 ・ポテトプランター 1台 ・スプレヤー 1台 ・ビートハーベスター 1台 ・ポテトハーベスター 1台 <p><生産方式等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4年輪作 ・麦の収穫・乾燥調製は共同施設による ・一部の作物は機械の共同利用による共同作業とする ・秋まき小麦収穫後に後作緑肥を栽培し土づくりを推進 ・スマート農業技術導入による省力化 ・一部の集約作物は雇用により家族労働時間の軽減を図る 	<ul style="list-style-type: none"> ・組合勘定やパソコン活用による経営計画・労務・財務・ほ場管理、青色申告の実施 ・作目別原価の把握と分析 ・税理士や各種経営管理ツールを活用した経営改善 ・資金繰り表等による資金管理 ・家族経営協定の締結に基づく給料制・休暇制の導入 	<p><労働></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族 2人 1,868時間 ・雇用 175時間 <p>(主たる従事者 1,038時間/人)</p> <p><経営収支></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業粗収益 2,600万円 ・農業経営費 2,057万円 ・農業所得 543万円 <p>(主たる従事者 302万円/人)</p>

※営農類型のうち、酪農に関する類型は酪農・肉用牛生産近代化計画の代表的な類型から試算し、例示している。

※営農類型のうち、畑作に関する類型はえんゆう農業協同組合「第5次中期農業振興計画・経営計画2019年～2023年」、北海道農業生産技術体系、北海道営農Naviなどにより試算し、例示している。

第4 第2及び第3に掲げる事項のほか、農業を担う者の確保及び育成に関する事項

1 農業を担う者の確保及び育成の考え方

遠軽町の基幹作物である小麦、てん菜、馬しよや酪農経営による生乳などの農畜産物を安定的に生産し、遠軽町農業の維持・発展に必要な効率的かつ安定的な経営を育成するため、生産方式の高度化や経営管理の合理化に対応した高い技術を有した人材の確保・育成に取り組む。このため、認定農業者制度、認定新規就農者制度及びそれらの認定を受けた者に対する各種支援制度を活用するとともに、遠軽町農業担い手対策協議会を中心とし、北海道農業経営・就農支援センター、網走農業改良普及センター遠軽支所、えんゆう農業協同組合等と連携して研修・指導や相談対応等に取り組む。

また、新たに農業経営を営もうとする青年等の就農を促進するため、これらの青年等に対する就農情報の提供、農地・農業用機械の取得や生活支援などの受入体制の整備、先進的な法人経営等での実践的研修の実施、青年等就農計画の認定・フォローアップ、認定新規就農者向けの支援策の積極的な活用、認定農業者への移行に向けた経営発展のための支援等を行う。

更に、農業従事者の安定確保を図るため、農業従事の態様等の改善、家族経営協定締結による就業制、休日制、ヘルパー制度の導入、高齢者及び非農家等の労働力や繁忙期の異なる産地間の労働力の活用等に取り組む。

加えて、遠軽町農業の将来を担う幅広い人材の確保に向け、職業としての農業の魅力等を発信するとともに、雇用されて農業に従事する者、定年退職後に農業に従事する者、他の仕事ともに農業に従事する者など農業生産に関わる多様な人材に対して、地域に定着し活躍できるよう必要な情報の提供、受入体制の整備、研修の実施、交流会の実施等の支援を行う。

2 遠軽町が主体的に行う取組

遠軽町は、新たに農業経営を営もうとする青年等や農業を担う多様な人材の確保に向けて、遠軽町農業担い手対策協議会を中心とし、網走農業改良普及センター遠軽支所やえんゆう農業協同組合など関係機関と連携して、就農等希望者に対する情報提供、住宅の紹介や移住相談対応等の支援、農業技術・農業経営に要する知識習得に向けた研修の実施や研修農場の整備、必要となる農用地等や農業用機械等のあっせん・確保、資金調達のサポートを行う。

また、就農後の定着に向けて、販路開拓や営農面から生活面までの様々な場面に対応するための相談対応や他の農家等との交流の場を設けるなど、必要となるサポートを就農準備から定着まで一貫して行う。

これらのサポートが一元的に行えるよう、地域の農業士・指導農業士等により設立した遠軽町農業担い手対策協議会が中心となり、関係団体と連携して受入から定着まで必要となるサポート体制を構築する。

さらに、新規就農者等が地域内で孤立することがないよう必要な配慮を行うとともに、地域農業を担う者として当該者を育成するときは、必要に応じて、協議の場への参加や地域計画の修正等の措置を講じる。

遠軽町は、新たに農業経営を始めようとする青年等が、本構想に基づく青年等就農計画を作成し、青年等就農資金、経営体育成支援事業等の国による支援策や道による新規就農関連の支援策を効果的に活用しながら、確実な定着、経営発展できるよう必要となるフォローアップを行うとともに、青年等就農計画の達成が見込まれる者に対しては、引き続き農業経営改善計画の策定を促し、認定農業者へと誘導する。

遠軽町主体となって北海道立農業大学校や網走農業改良普及センター遠軽支所、農業委員、指導農業士、えんゆう農業協同組合、各種生産者組織等と連携・協力して「営農指導カルテ」を作成し、研修や営農指導の時期・内容などの就農前後のフォローアップの状況等を記入・共有しながら、巡回指導の他、年に1回は面接を行うことにより、当該青年等の営農状況を把握し、支援を効率的かつ適切に行うことができる仕組みをつくる。

新規就農者が地域内で孤立することのないよう、地域計画の作成・見直しの話し合いを通じ、地域農業の担い手として当該者を育成する体制を強化する。また、各作目に応じた生産者組織等への加入を促し、安定した出荷先や販路確保を支援すると共に、町内道の駅等に対する出荷のためのアドバイスや他産業の経営ノウハウを習得できる交流研修等の機会の提供などにより、きめ細やかな支援を実施する。

青年等が就農する地域の地域計画との整合に留意しつつ、本構想に基づく青年等就農計画の作成を促し、青年等就農資金、農業次世代人材投資資金、強い農業・担い手づくり総合支援交付金等の国の支援策や道の

新規就農関連事業を効果的に活用しながら経営力を高め、確実な定着へと導く。

さらに、青年等就農計画の達成が見込まれる者については、引き続き農業経営改善計画の策定を促し、認定農業者へと誘導する。

3 関係機関との連携・役割分担の考え方

遠軽町は、農業委員会、農業協同組合、網走農業改良普及センター遠軽支所等の関係機関と連携しつつ、遠軽町農業担い手対策協議会を中心として就農等希望者への情報提供や相談対応、研修の実施、農用地や農業用機械等のあっせん・確保、就農後の定着に向けたサポート等を以下の役割分担により実施する。

- ① 農業委員会、農地中間管理機構（北海道農業公社）は、新たに農業経営を開始しようとする者に対して、農地等に関する相談対応、農地等に関する情報の提供、農地等の紹介・あっせん等及び農地中間管理機構を通じた農地中間管理事業の活用促進を行う。
- ② 遠軽町農業担い手育成センター、遠軽町農業担い手対策協議会は、就農に向けた情報提供及び就農相談を行うと共に総合窓口として関係機関と就農希望者、新規就農者との連携・調整を行う。
- ③ えんゆう農業協同組合は、青年等就農計画及び農業経営改善計画の達成に向けた経営指導や各種制度資金の活用支援、フォローアップを行う。
- ④ 網走農業改良普及センター遠軽支所、北海道農業大学校は、就農前、就農後の生産技術、機械操作技術や経営指導、フォローアップを行う。
- ⑤ 遠軽町は、遠軽町農業担い手対策協議会の連携・調整をバックアップし、町の移住担当、町営住宅担当窓口等との連携により就農希望者への移住、生活面に対する相談、各種就農支援資金等の情報提供、フォローアップを行う。
- ⑥ 農業士・指導農業士は、就農に向けた生産技術、農業経営のノウハウ等の指導、地域一帯となった受入れ体制の整備を行う。
- ⑦ 新規就農者を受け入れる地域の認定農業者及び各生産者組織は、今後の農業を担う者を受け入れるための地域の雰囲気、コミュニティづくりを行うと共に、地域の担い手として各生産者組織への参画を促し、生産から収穫、販路確保等、地域を越えた受入れ体制の整備を行う。

4 就農等希望者のマッチング及び農業を担う者の確保・育成のための情報収集・相互提供

遠軽町は、遠軽町農業担い手対策協議会及びえんゆう農業協同組合と連携して、第三者継承希望農家等の経営形態、継承時の経営形態、就農受入体制、研修内容、就農後の収入・生活のイメージ等、就農等希望者が必要とする情報を収集・整理し、北海道及び農業経営・就農支援センターへ情報提供する。

農業を担う者の確保のため、遠軽町農業担い手対策協議会を中心として、えんゆう農業協同組合等の関係機関と連携して、経営の移譲を希望する農業者の情報を積極的に把握するよう努め、遠軽町の区域内において後継者がいない場合は、北海道及び農業経営・就農支援センター等の関係機関へ情報提供する。さらに、新たに農業経営を開始しようとする者が円滑に移譲を受けられるよう農業経営・就農支援センター、北海道農業公社、遠軽町農業委員会等の関係機関と連携して、円滑な継承に向けて必要なサポートを行う。

北海道農業公社やえんゆう農業協同組合などと連携しながら、道内外で開催される就農フェア等を活用し、就農希望者に対し、遠軽町内での就農に向けた情報（研修、生活環境、住宅等に関する情報）の提供を行う。また、遠軽町内の農業法人や先進農家等と連携して、高校や大学等からの研修やインターンシップの受入れを行う。

生徒・学生が農業に興味関心を持ち、農業が将来の進路の選択肢の一つとなるよう教育機関や教育委員会と連携しながら、各段階の取組を実施する。具体的には、生産者との交流の場を設けたり、農業体験ができる仕組みをつくることで、農業に関する知見を広められるようにする。

第5 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標 その他農用地の効率的かつ総合的な利用に関する事項

1 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標

遠軽町農業の持続的な発展を図るため、第2に例示するような効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用（農作業受託面積を含む）の集積に関する目標を、次のとおりとする。

る。

効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標	備考
遠軽町農用地面積の95%程度	

2 その他農用地の効率的かつ総合的な利用に関する事項

遠軽町、遠軽町農業委員会、農地中間管理機構（北海道農業公社）、えんゆう農業協同組合等の関係機関・団体が連携し、地域計画の策定を通じ、地域の合意形成を図りながら、面としてまとまった形での農用地の集約化を進めることにより、団地面積の増加を図るとともに、担い手への農用地の集積を加速する。

中山間地域や担い手不足地域では、地域全体で農用地の確保・有効利用を図るため、中小・家族経営など地域社会の維持に重要な役割を果たしている経営体の新規就農促進を図るエリアや有機農業の団地化を図るエリア等の設定を促進するとともに、放牧利用や蜜源利用、省力栽培による保全等の取組を進める。

第6 農業経営基盤強化促進事業に関する事項

遠軽町は、北海道が策定した「農業経営基盤強化促進基本方針」の第5の農業経営基盤強化促進事業の実施に関する基本的な事項に定められた方向に則しつつ、遠軽町農業の地域特性、即ち、複合経営を中心とした多様な農業生産の展開や兼業化の著しい進行などの特徴を十分踏まえて、農業経営基盤の強化の促進に関する計画である地域計画を定め、その実現に向けて、農地中間管理機構による農地中間管理事業及び特例事業を活用して農用地について担い手への集積・集約化を促進し、農用地の効率的かつ総合的な利用の推進を図る。

遠軽町は、農業経営基盤強化促進事業として、次に掲げる事業を行う。

1 第18条第1項の協議の場の設置の方法、第19条第1項に規定する地域計画の区域の基準その他第4条第3項第1号に掲げる事業に関する事項

- (1) 幅広い農業者の参画を図るため、協議の場を設置する際は遠軽町の基幹作物や自給飼料作物の収穫等の農繁期を除いて設定することとし、開催に当たっては、遠軽町、えんゆう農協のホームページやコミュニケーションツールの利用等に加え、他の農業関係の集まりを積極的に活用し、周知を図る。
- (2) 参加者については、農業者、町担当職員、農業委員、農地利用最適化推進委員、えんゆう農業協同組合、農地中間管理機構の農地相談員、その他の関係者等から柔軟な参加を促し、協議の場において、地域の中心となる農用地の出し手及び受け手の意向が反映されるように調整を行う。
- (3) 協議の場の参加者等から協議事項に係る問合せへの対応を行うための窓口を遠軽町農業委員会事務局に設置する。
- (4) 農業上の利用が行われる農用地等の区域については、これまで人・農地プランの実質化が行われている区域を基に、農業振興地域内の農用地等が含まれるように設定することとし、その上で、様々な努力を払ってもなお、農業上の利用が見込めず、農用地として維持することが困難な農用地については、活性化計画を作成し、粗放的な利用等による農用地の保全等を図る。
- (5) 遠軽町は、地域計画の策定に当たって、北海道・遠軽町農業委員会・農地中間管理機構（北海道農業公社）・えんゆう農業協同組合等の関係団体と連携しながら、協議の場の設置から地域計画の公表に至るまで、適切な進捗管理を行うこととし、地域計画に基づいて利用権の設定等が行われているか進捗管理を毎年実施する。

2 農用地利用改善事業の実施の単位として適当であると認められる区域の基準その他農用地利用改善事業の実施の基準に関する事項

- (1) 農用地利用改善事業の実施の促進

遠軽町は、地域関係農業者等が農用地の有効利用及び農業経営の改善のために行う自主的努力を助長するため、地域関係農業者等の組織する団体による農用地利用改善事業の実施を促進する。

(2) 区域の基準

農用地利用改善事業の実施の単位として適当であると認められる区域の基準は、土地の自然的条件、農用地の保有及び利用の状況、農作業の実施の状況、農業経営活動の領域等の観点から、農用地利用改善事業を行うことが適当と認められる地縁的なまとまりのある地域とするものとする。

(3) 農用地利用改善事業の内容

(2)の区域において、地域農業関係者等の組織する団体が、農用地の効率的かつ総合的な利用を図るための、作付地の集団化、農作業の効率化その他の措置及び農用地の利用関係の調整を図るための農用地利用規程を作成し、それに基づいて認定農業者等の担い手へ農地の集積を推進するものとする。

(4) 農用地利用規程の内容

① 農用地利用改善事業の準則となる農用地利用規程においては、次に掲げる事項を定めるものとする。

ア 農用地の効率的かつ総合的な利用を図るための措置に関する基本的な事項

イ 農用地利用改善事業の実施区域

ウ 作付地の集団化その他農作物の栽培の改善に関する事項

認定農業者とその他の構成員との役割分担その他農作業の効率化に関する事項

オ 認定農業者に対する農用地の利用の集積の目標その他農用地の利用関係の改善に関する事項

カ その他必要な事項

② 農用地利用規程においては、①に掲げる全ての事項についての実行方策を明らかにするものとする。

(5) 農用地利用規程の認定

① (2)に規定する区域をその区域とする地域関係農業者等の組織する団体で、定款又は規約及び構成員につき法第23条第1項に規定する要件を備えるものは、基本要綱様式第4号の認定申請書を遠軽町に提出して、農用地利用規程について遠軽町の認定を受けることができる。

② 遠軽町は、申請された農用地利用規程が次に掲げる要件に該当するときは、法第23条第1項の認定をする。

ア 農用地利用規程の内容が基本構想に適合するものであること。

イ 農用地利用規程の内容が農用地の効率的かつ総合的な利用を図るために適切なものであること。

ウ (4)の①のエに掲げる役割分担が認定農業者の農業経営の改善に資するものであること。

エ 農用地利用規程が適正に定められており、かつ、申請者が当該農用地利用規程で定めるところに従い農用地利用改善事業を実施する見込みが確実であること。

③ 遠軽町は、②の認定をしたときは、その旨及び当該認定に係る農用地利用規程を遠軽町の掲示板への提示その他の適切な方法により公告する。

④ ①から③までの規定は、農用地利用規程の変更についても準用する。

(6) 特定農業法人又は特定農業団体を定める農用地利用規程の認定

① (5)の①に規定する団体は、農用地の保有及び利用の現況及び将来の見通し等からみて農用地利用改善事業が円滑に実施されないと認めるときは、当該団体の地区内の農用地の相当部分について農業上の利用を行う効率的かつ安定的な農業経営を育成するという観点から、当該団体の構成員からその所有する農用地について利用権の設定等若しくは農作業

の委託を受けて農用地の利用の集積を行う農業経営を営む法人（以下「特定農業法人」という。）又は当該団体の構成員からその所有する農用地について農作業の委託を受けて農用地の利用の集積を行う団体（農業経営を営む法人を除き、農業経営を営む法人となることが確実であると見込まれること、定款又は規約を有していることなど政令第9条に掲げる要件に該当するものに限る。以下「特定農業団体」という。）を、当該特定農業法人又は特定農業団体の同意を得て、農用地利用規程において定めることができる。

② ①の規定により定める農用地利用規程においては、(4)の①に掲げる事項のほか、次の事項を定めるものとする。

ア 特定農業法人又は特定農業団体の名称及び住所

イ 特定農業法人又は特定農業団体に対する農用地の利用の集積の目標

ウ 特定農業法人又は特定農業団体に対する農用地の利用権の設定等及び農作業の委託に関する事項

③ 遠軽町は、②に規定する事項が定められている農用地利用規程について、(5)の①の認定の申請があった場合において、農用地利用規程の内容が(5)の②に掲げる要件のほか、次に掲げる要件に該当するときは、(5)の①の認定をする。

ア ②のイに掲げる目標が(2)に規定する区域内の農用地の相当部分について利用の集積をするものであること。

イ 申請者の構成員からその所有する農用地について利用権の設定等又は農作業の委託を行いたい旨の申出があった場合に、特定農業法人が当該申出に係る農用地について利用権の設定等若しくは農作業の委託を受けること又は特定農業団体が当該申出に係る農用地について農作業の委託を受けることが確実であると認められること。

④ ②で規定する事項が定められている農用地利用規程（以下「特定農用地利用規程」という。）で定められた特定農業法人は認定農業者等と、特定農用地利用規程は認定計画とみなす。

(7) 農用地利用規程の特例

① (5)の①に規定する団体は、その行おうとする農用地利用改善事業の実施区域を含む周辺の地域における農用地の保有及び利用の現況及び将来の見通し等からみて効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積を図ることが特に必要であると認めるときは、当該実施区域内の農用地について利用権の設定等を受ける者を認定農業者及び農地中間管理機構に限る旨を、当該認定農業者及び農地中間管理機構の同意を得て、農用地利用規程に定めることができる。

② ①の規定により定める農用地利用規程においては、(6)の②に掲げる事項のほか、次の事項を定めるものとする。

ア 認定農業者の氏名又は名称及び住所

イ 認定農業者に対する農用地についての利用権の設定等に関する事項

ウ 農地中間管理事業の利用に関する事項

エ その他農林水産省令で定める事項

③ 遠軽町は、①の規定により定められる農用地利用規程の申請があったときは、その旨を遠軽町掲示板への掲示その他の適切な方法により公告し、当該農用地利用規程を当該公告の日から2週間公衆の縦覧に供する。この場合、利害関係人は、当該縦覧期間満了日まで当該農用地利用規程について、遠軽町に意見書を提出することができる。

④ 遠軽町は、①に規定する農用地利用規程について申請があった場合、(5)の②の要件のほか、次に掲げる要件に該当するとき、遠軽町は(5)の①の認定を行う。

ア 農用地利用改善事業の実施区域内の農用地につき1の(8)の権利を有する者（以下「所有者」という。）の3分の2以上の同意が得られていること。

イ 農用地利用改善事業の実施区域内の農用地の所有者等から当該農用地について利用権の設定等を行いたい旨の申出があった場合に、当該認定農業者が当該利用権の設定等を

受けることが確実であると認められること。

- ⑤ ①に規定する事項が定められている農用地利用規程について、認定を受けた場合には、当該農用地利用規程に係る農用地利用改善事業の実施区域内の農用地の所有者等（農地中間管理機構を除く。）は、当該農用地利用規程において利用権の設定等を受ける者とされた認定農業者及び農地中間管理機構以外の者に対して、賃借権、使用貸借による権利その他の施行規則第21条の4で定める使用及び収益を目的とする権利の設定若しくは移転又は所有権の移転を行ってはならない。
 - ⑥ ①の認定において、利用権の設定を農地中間管理機構に行う場合の当該利用権の設定等の対価は、当該農用地の位置、形状、環境、収益性等を比較考量し、算出する。
 - ⑦ ①の農用地利用規程の有効期間は、認定を受けた日から起算して5年とする。
 - ⑧ ①の認定を受けた団体は、毎年遠軽町長が指定する月に農用地利用改善事業の実施状況に関し、必要な報告をすることとする。
- (8) 農用地利用規程の変更等
- ① (5)の②の認定を受けた団体（以下「認定団体」という。）は、(5)の①の認定に係る農用地利用規程を変更しようとするときは、遠軽町の認定を受けるものとする。
ただし、特定農用地利用規程で定められた特定農業団体が、施行規則第21条の5で定めるところにより、その組織を変更して、その構成員を主たる組合員、社員若しくは株主とする農業経営を営む法人となった場合において当該特定農用地利用規程を変更して当該農業経営を営む法人を特定農業法人として定めようとするとき又は施行規則第22条で定める軽微な変更をしようとする場合はこの限りでない。
 - ② 認定団体は、①のただし書きの場合（施行規則第22条で定める軽微な変更をしようとする場合を除く。）は、その変更をした後、遅滞なく、その変更した農用地利用規程を遠軽町に届け出るものとする。
 - ③ 遠軽町は、認定団体が(5)の①の認定に係る農用地利用規程（①又は②の規定による変更の認定又は届出があったときは、その変更後のもの）に従って農用地利用改善事業を行っていないことその他政令第13条で定める事由に該当すると認めるときは、その認定を取消することができる。
 - ④ (5)の②及び(6)の③並びに(7)の③及び(7)の④の規定は①の規定による変更の認定について、(5)の③の規定は①又は②の規定による変更の認定又は届出について準用する。
- (9) 農用地利用改善団体の勧奨等
- ① 認定団体は、当該認定団体が行う農用地利用改善事業の実施区域内の農用地の効率的かつ総合的な利用を図るため特に必要があると認めるときは、その農業上の利用の程度がその周辺の当該区域内における農用地の利用の程度に比べ、著しく劣っていると認められる農用地について、当該農用地の所有者（所有者以外に権原に基づき使用及び収益をする者がある場合には、その者）である当該認定団体の構成員に対し、認定農業者（特定農用地利用規程で定めるところに従い、農用地利用改善事業を行う認定団体にあつては、当該特定農用地利用規程で定められた特定農業団体を含む。）に利用権の設定等又は農作業の委託を行うよう勧奨することができる。
 - ② ①の勧奨は、農用地利用規程に基づき実施するものとする。
 - ③ 特定農用地利用規程で定められた特定農業法人及び特定農業団体は、当該特定農用地利用規程で定められた農用地利用改善事業の実施区域内にその農業上の利用の程度がその周辺の当該区域内における農用地の利用の程度に比べ、著しく劣っていると認められる農用地がある場合には、当該農用地について利用権の設定等又は農作業の委託を受け、当該区域内の農用地の効率的かつ総合的な利用を図るよう努めるものとする。
- (10) 農用地利用改善事業の指導、援助
- ① 遠軽町は、農用地の有効かつ適切な利用を図るため、必要があると認めるときは、農用地利用改善団体となる要件を備える団体に対して、農用地利用規程を定め、農用地利用改

善事業を行うよう促す。

- ② 遠軽町は、農用地利用改善団体が、農用地利用改善事業の実施に関し、農業委員会、農業協同組合及び農地中間管理機構の指導及び助言を求めてきたときには、それぞれの組織の役割に応じて、農用地利用改善団体の主体性を尊重しながら、その団体の活動を助長する上で必要な指導及び助言が積極的に行われるように努める。

3 農業協同組合が行う農作業の委託のあっせんの促進その他の委託を受けて行う農作業の実施の促進に関する事項

地域計画の実現に当たっては、担い手が受けきれない農用地について適切に管理し、将来的に担い手に引き継ぐことが重要であるため、農作業受委託の推進に向けて、農業支援サービス事業者による農作業受託料金の情報提供の推進や、農作業受託事業を実施する生産組織の育成、地域計画の策定に向けた協議における農作業受委託の活用の周知等を行うことにより、農作業の受委託を促進するための環境の整備を図る。

4 その他農業経営基盤強化促進事業の実施に関し必要な事項

(1) 農業経営基盤の強化を促進するために必要なその他の関連施策との連携

ア 遠軽町は、国営及び道営等の各種基盤整備事業による農業生産基盤整備の促進を通じて、効率的かつ安定的な農業経営を目指す者が経営発展を図っていく上での条件整備を図る。

イ 遠軽町は、草地開発事業等を積極的に活用し、酪農経営における自給飼料の安定確保を図る。

ウ 遠軽町は、地域の農業の振興に関するその他の施策を行うに当たっては、農業経営基盤強化の円滑な促進に資することとなるように配慮するものとする。

(2) 推進体制等

① 事業推進体制等

遠軽町は、遠軽町農業委員会、網走農業改良普及センター遠軽支所、えんゆう農業協同組合、農用地利用改善団体、その他の関係団体と連携しつつ、農業経営基盤強化の促進方策について検討するとともに、今後10年にわたり、第1で掲げた目標や第2、第3の指標で示される効率的かつ安定的な経営の育成に資するための実現方策等について、各関係機関・団体別の行動計画を樹立する。

またこのような長期行動計画と併せて、年度別活動計画において当面行うべき対応を各関係機関・団体別に明確化し、関係者が一体となって合意の下に効率的かつ安定的な経営の育成及びこれらへの農用地利用の集積を強力に推進する。

② 農業委員会等の協力

遠軽町農業委員会、えんゆう農業協同組合は、農業経営基盤強化の円滑な実施に資することとなるよう、遠軽町農業再生協議会等のもとで相互に連携を図りながら協力するように努めるものとし、遠軽町は、このような協力の推進に配慮する。

5 農地中間管理機構が行う特例事業に関する事項

(1) 遠軽町は、北海道一円を区域として特例事業を行う農地中間管理機構との連携の下に、普及啓発活動等を行うことによって同機構が行う事業の実施の促進を図る。

(2) 遠軽町、遠軽町農業委員会、えんゆう農業協同組合は、農地中間管理機構が行う中間保有・再配分機能を活かした特例事業を促進するため同機構に対し、情報提供、事業の協力を行うものとする。

第7 その他

この基本構想に定めるもののほか、農業経営基盤強化促進事業の実施に関し必要な事項については、別に定めるものとする。

附 則

- 1 この基本構想は、令和5年9月28日から施行する。
- 2 農業経営基盤強化促進法等の一部を改正する法律（令和4年法律第56号）において、同法による改正前の農業経営基盤強化促進法の適用を受けるとされた規定に関するこの基本構想の適用については、なお従前の例によるものとする。

